

学びに対する前向きな意識は小中高と低下していく

進研アドは、「社会で活躍するために必要となる力をどれだけ身に付けられるか」を、大学選びの観点とすることを、高校生および社会に対して提案している。この進路選択の価値観が根付いていくには、高校時代はもとより、小学校・中学校時代から、今の学びが将来にどうつながるのかを理解したうえで、自律的に学ぶ意欲を持って、学習を積み重ねることが必要だ。大学は、これに対してどんな主体的かかわりができるだろうか。まずは、児童・生徒の意識面の現状を見ていく。

代「小・中学校時代」の場合に圧倒的に高く、「大学入学後」「(大学在学中の今も) まだ考えていない」を10数～20数ポイント上回っている。

逆に「すぐに社会に出るのが不安」「自由な時間を得たい」「周囲の人がみな行く」という消極的な進学理由を挙げた割合は、職業を意識した時期が「大学入学後」「まだ考えていない」人が「小・中学校時代」の人より20～30ポイントも高い。職業を意識した時期が遅いほど、大学で学ぶことを将来の進路と関連付けられないまま、大学選びを行っている様子が見えてくる。

就きたい職業「あり」は5年前より減少

では、小・中学生、高校生の段階で、どれくらいの人が将来の職業をイメージできているのだろうか。

図表2は、就きたい職業の有無を経年で調べた結果である。就きたい職業

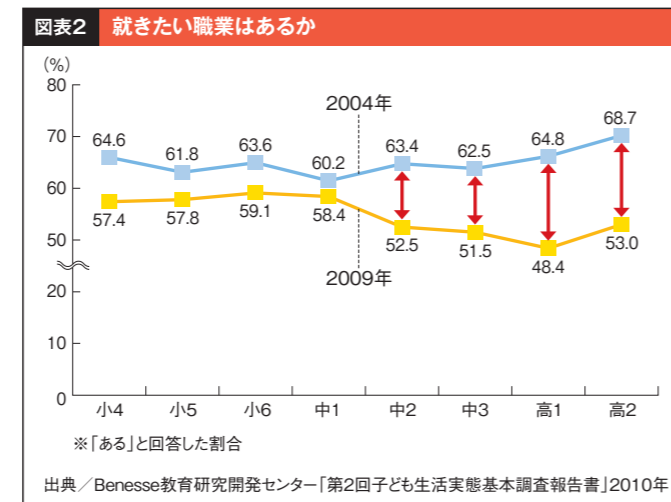
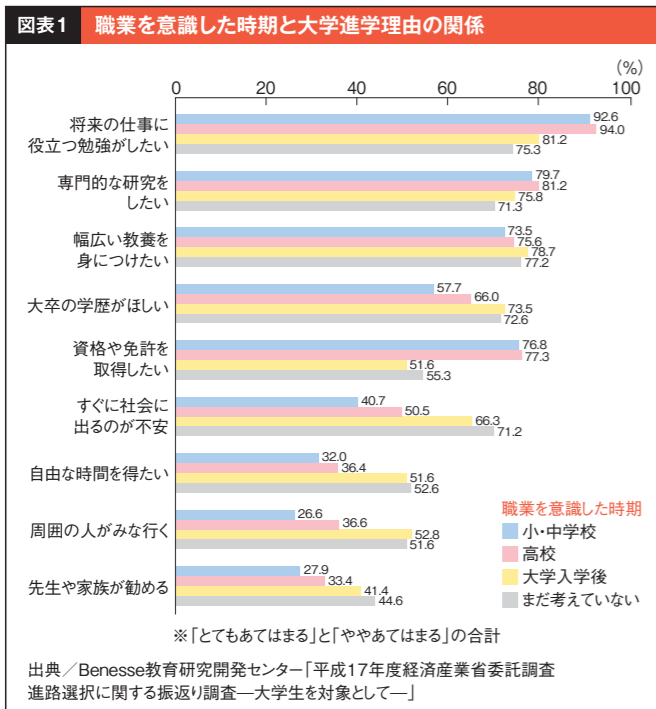
職業を意識した時期が進学目的を左右する

『Between』2012年2-3月号では、学ぶ目的ややりたいことが明らかで、満足して入学した学生は、たとえ第1志望ではなくても、活動意欲が高く、就職内定率も高いことを紹介した(24-25ページ)。大学での学びと、将来

の仕事や社会での生き方とを関連付けた大学選択が、学生生活を充実させ、成長を後押ししているものと考えられる。

職業を意識した時期が、大学進学の目的に影響を及ぼしていることを示すデータがある。図表1によると、「将来の仕事に役立つ勉強がしたい」「資格や免許を取得したい」など、大学進

学と将来の職業を関連させて進路選択を行った割合は、職業を意識した時期が「高校時



があると回答したのは小4～中1では6割程度だが、中2・中3では5割前半に落ち、高1では半数以下だ。高校卒業後の進路を現実的に考え始めているはずの高2でも53%にとどまる。

5年前と比較してみると、小4～高2のすべてで、就きたい職業がある児童・生徒が減っていることがわかる。その差は、小5～中1では数ポイント程度だが、中2から減少幅がめだって大きくなり、高1、高2ではそれぞれ16ポイントに達している。

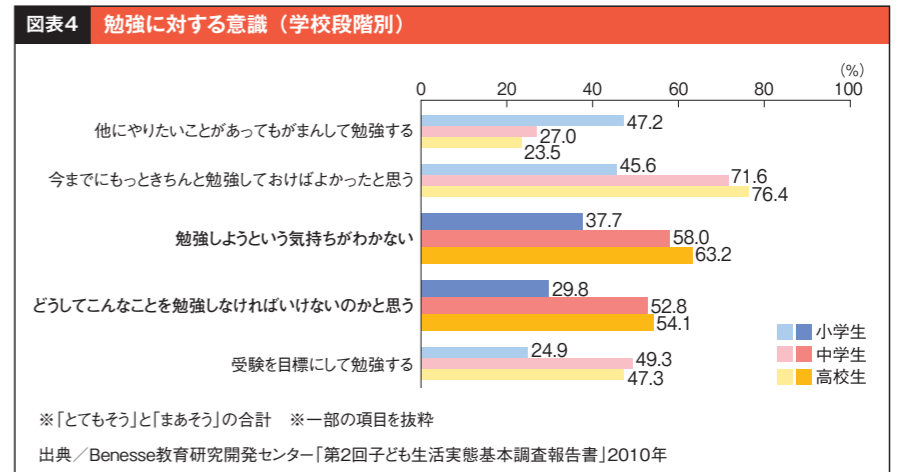
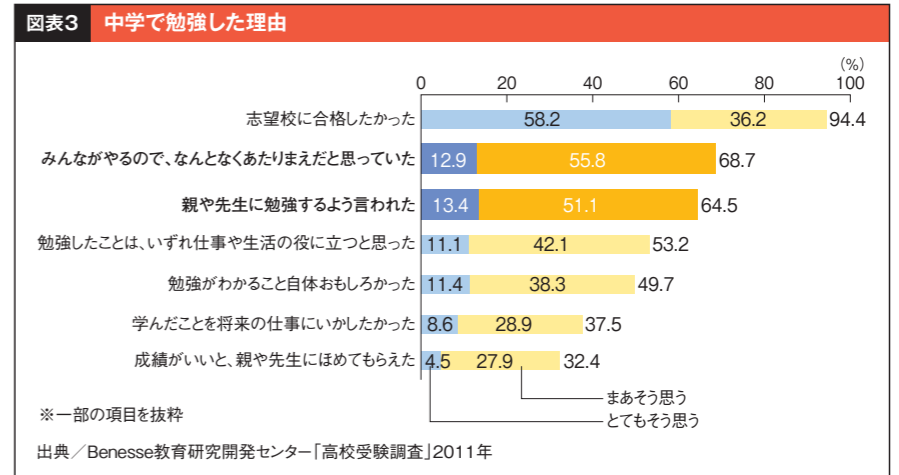
ここ数年、経済状況が不安定で、高校卒、大学卒ともに厳しい就職状況が続く中、職業の選択肢を広げにくく、将来の仕事を実践的・実利的に考える傾向が5年前以上に強くなっているのではないだろうか。

中学生の3分の2は「周りが言うから勉強」

自律的な大学選択を促す条件として、小学校など早い段階から生き方や働くことの意味を考えさせるとともに、仕事や社会とのかかわりの中で、目の前の勉強がなぜ必要なのか、社会を生き抜くために何をどのように学ばなければならないかを理解させることが必要だろう。

では、児童・生徒の勉強に対する考え方はどのようなものか。

図表3は、高校1年生を対象に行った、高校受験に関する振り返り調査の結果である。中学時代の勉強理由を聞いたところ、94%が志望校への合格を挙げる一方で、約3分の2の生徒が「みんながやるので、なんとなくあたりまえ」と答え、「親や先生に勉強するよう言われた」と答えて、「勉強したことは、いずれ仕事や生活の役に立つ」「勉強がわかること自体がおもしろい」は、それぞれ約半数にとどまっている。



「学んだことを将来の仕事に生かしたかった」という、より積極的な理由を挙げた生徒は4割に満たない。

図表4は、勉強に対する意識を学校段階別にまとめたものだ。「勉強しようという気持ちがわからない」は、中学生が58%、高校生が63%、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」は、中学生が53%、高校生が54%に達し、学ぶための動機付けができていない状況が見えてくる。

学校段階や学年が進むにつれ、こうした傾向が強くなることは、特に注目したい。図表4の先の2項目は、小学生ではそれぞれ4割弱と3割で、勉強に疑問を感じる者は中高と進むにしたがって増えている。同様の傾向は図表2でも確認でき、中1から中2にかけて明らかな意識の変化が見られる。

小中高では学ぶ意欲を育む試行が

こうしたギャップをできるだけ小さくし、学校間をつないで学ぶ意欲を育てていくために、小学校、中学校、高校ではさまざまな取り組みを始めている。各学校段階の教育をスムーズに接続し、児童・生徒が自立と成長をキーに進学先を選ぶ目を養うために、大学は、初等・中等教育の実態を把握したうえで、そこにどうかかわるべきか、主体的に考えなければならないときではないだろうか。

こうした観点に立ち、次ページから、小学校、中学校、高校における「教育接続」の工夫や取り組み、そこに大学がかかわっている事例について見ていく。